

幼児の経験領域とその指導

Teacher's Guide To Education In Early Childhood
Compiled by the Bureau of Elementary Education,
State Department of Education, California
State Department of Education, Sacramento. 1956

これは前回に紹介した「幼年期の教育」という教師のためのハンドブックの紹介のつづきである。前にも述べたように、この書物の対象とする年齢は、学令前一年の幼稚園と、小学校の一年生および二年生である。

第七章 主な経験領域とその指導

真の教育は、子どもが成長に役立つ経験をするときにはじめて行なわれるものである。学習するためには、子どもはある環境の中に入っていく、その中の何かに興味をひかれ、そしてそれを自分のやり方のためしてみるということが必要である。このような環境をつくっていくのには、注意深い計画が必要である。それによって、子どもたちは満足した生活を保証され、要求を満すことができるのである。もちろん、計画は柔軟性がなければならず、子どもたちが新しい要求を感じたり、教師が子どもの中に新しい能力を発見したときにはそれに適合して変更せねばならない。

教師の準備

このような計画をつくるためには、教師は子どものぶつかる経験領域のことをよく知っておかねばならない。また、用いる材料のこ

とを知るとともに、子どもの要求になつてそれをを用いる方法を考えておかねばならない。経験領域を知るために、教師が次のようなことをすると役立つであろう。

1、それについて知ることのできるような場所に見学に行くこと。

2、そのことについて読書すること。

3、パンフレット、地図、写真などを集めること。

4、その経験領域を扱ったフィルムをみること。

5、そのことについてよく知っている人と話をすること。

その経験領域について熟知したならば、次にはそれをどういう順序で進めていったらよいかを整理してみる。それは子どもにもあるきまつた型を押しつけるという意味ではなく、先生と子どもとが協力して学習経験をすすめるためであり、ある経験から次の経験へと移行するのにとまどわないためである。もし必要ならば、いつでもその計画を変更するだけの心の準備がなくてはならない。

教師は子どもが理解をすすめていくに当っ

て、観察したり、やってみたりすることを知
っている必要がある。たとえば、子どもたち
は、麦がどのようにして成長するか、舟はな
ぜ浮かぶか、なぜ野菜をつくと土がやわら
かくなるかなどを知りたいと思うだろう。教
師は、子どもたちがこういう点についてため
してみることができるよう、準備があつた
方がよい。

生産の過程について教師が知っていること
も役立つ。たとえば、パンを焼く過程、チー
ズをつくること、粘土からやきものをつくる
こと、羊毛から布をつくること、染物など。
教師はまた、子どもたちがつくりたいと思
うものをどのようにしてつくるかを知ってい
る必要がある。たとえば、汽船、トラック、
店、壺、人形と家具など。こういうものは、
デザインもかんたんで、容易に手に入る材料
でなければならぬ。そして教師自身、モデ
ルを作ってみることも必要である。

また、教師自身の知識をまたためにいろい
ろの材料やパンフレットを集めるだけでな
く、子どもの経験をひろげ豊富にするために
書物や、雑誌やパンフレット、写真、実物な

どを集めることが必要である。また、それに
役立つ人を探して、適当な時に子どもたちに
話をしてもらうことは大へんよい。

△経験への導入のしかた▽

学習は刺激に反応することからはじまる。
ある単元を開始するのに必要な刺激と興味
は、前の経験のつづきですすでに存在すること
もあるし、また新たに刺激が加えられなけれ
ばならないこともある。

すでに存在する興味から出発すること

ある単元をはじめのものにもっともよい方法
は、すでに進行している経験から出発して、
そこから新しい考えをひき出すことである。
それによって経験の連続性を保証することが
できる。たとえば、もしも幼稚園期の終り
に、子どもが鉄道に興味をもっているなら
ば、一年生の教師はこの興味から出発すると
よい。幼稚園のときに子どもたちが汽車に荷
物や客をのせて、つみきの停車場から停車場
へと運んでいるが、終点まできてもそれ以上
は発展させようとしていないということがわ
かったとする。これはそれに関連する経験を

すすめるのによい手がかりである。小学校の
第一日には、幼稚園の時の経験の中心となっ
ていたものを、教室の中に環境をつくってお
く。たとえば、つみきの停車場と汽車と旅客
とを用意しておく。そして子どもたちにそれ
で遊ぶ機会を与え、その活動について話しあ
う。その話し合いの中で、汽車は終点までき
たらどうするのかなどを教師は質問する。こ
うして、子どもたちに、この遊びをもっと満
足のいくものにするには、もっと知らなけ
ればならない必要性を気づかせる。そして、
そこから出てきた要求を満たすために、見学
や、お話や、絵を用意するのである。この経
験が発展すれば、船と港の生活を中心とする
研究にまですすむことができるだろう。

一年生のこのような経験の終りには、子ど
もたちは実際に港を見学し、貨物船からバナ
ナの荷をおろすのをみるとする。そうする
と、次には自分達の教室の港で、バナナの荷
をおろし、トラックにつみこむという活動が
あらわれるであろう。もしも熱心な二年生の
先生がこの子どもたちを受けつぐならば、子
どもたちのこのような興味の中に卸市場の研

究の糸口を見出すだろう。教師は二年生の最初の日に、教室に港の環境をつくっておく。バナナのトラックがドックのそばで待っている。子どもたちは荷物をつんだりおろしたりする機会が与えられる。そしてその活動について話し合う間に、教師は、トラックの運転手はそのバナナをどうするのだろうかと質問する。多分子どもたちはそれを知らないだろう。そこで卸市場への見学を計画する。そしてこのような興味から出発して、一連の経験をはじめることが出来る。

このような経験を通して子どもたちを指導するのには、教師は子どもたちの社会的学習を常にひろげ、たえず深める努力をせねばならない。そのためには教師は、価値ある経験に導びくのに役立つようなあらゆる機会を敏感につかまなくてはならない。そして多くの機会の中から、もっとも発展に役立つものを選び、子どもたちがその方向に活動をすすめるように整えていかなければならない。

刺激を加えることよって興味を起す場合

ある場合には、前からつづいた興味がないことがある。そのときは、子どもの一般的な

興味を知っていれば、教師はそれにかなうように環境をつくることができる。こうしてそのグループに適当な経験領域が選ばれたら、教師はそれにふくまれる要素を注意深く調べ、どこを手がかりにして出発したらよいかを考える。そして、子どもたちの興味を刺激するのには、この環境の中に何をもち出せばよいか、ごっこ遊びをしようという気持ちを起させるのに何をしたらよいか、探索し、構成し、表現し、活動する気持ちを起させるのに何をしたらよいかと自問自答してみる。

たとえば、町の生活が適当であると教師が考えたとしたら、六才児は町の生活のどういうことに興味をもつかを考えてみる。それには、店や、劇場や、公園やいろいろのものがあるが、教師は動くもの、すなわち交通を出発点として選んだとしよう。しかし交通の中でもどういう点にもっとも興味があるかまだわからない。そこで教師は部屋の中に三種類か四種類のセンターをつくり、興味をひくような材料をそろえてみる。ある一つのセンターを飛行機とする。教師はそこに飛行機のポスターを貼り、着陸の順序を示す小さなボス

ターを貼り、旅客が乗降し、郵便車がくる写真を貼る。また、いろいろの型の飛行機の写真や、飛行場の事務室の写真を貼る。また、

いろいろの飛び方を示した書物をひろげておく。低いテールには、先生の作った飛行機の模型がおいてある。パイロットや旅客を示す人形もおいてある。他のセンターにも同様の環境設定をするともに、いろいろの大きな箱や、紙、クレヨン、はさみ、布などをテールの上に出しておく。イスズルはいつも出している。このくらい場の設定をしておくと、大がいの子どもたちは直ちに仕事にとりかかる。あるものはポットをつくり、あるものは家をつくる。そしてたくさんの子どもが飛行機をつくりはじめる。少数のものは絵をかき、本をよみ、あるいはぶらぶら歩きまわる。こうして活動がすすむうちに、どれか一つの興味が圧倒的になってくる。どの種類が選ばれるかは、その近隣社会の性格による。こうして、幼児の活動を刺激するように環境を整えることによって、力動的な町の生活の研究がはじまるのである。

(津守)